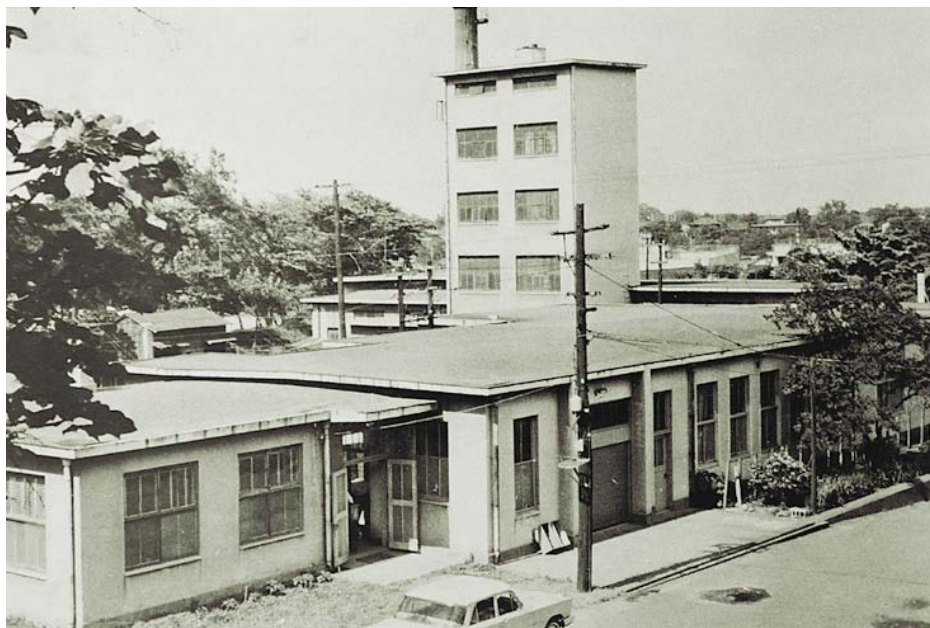


待ち望まれた 家畜病院



大空襲後、20年を経て再建された家畜病院
「東京大学卒業アルバム1966年(昭和41年)／東京大学アルバム編集会編」より

家

畜病院は1880年(明治13年)に診療施設として市民に公開されました。東京帝国大学農学部となったときの家畜病院は、手術室、診療室に加え、甲病舎(馬、牛等20頭収容)、乙病舎(中小家畜等40頭収容)、伝染病隔離病舎も備え、かなり大規模な病院だったようです。しかし、1945年(昭和20年)の大空襲ですべて焼失し、戦後は農学部3号館2階で細々とした診療が続けられていました。

その後、希望に満ちて1952年に建てられたのが写真手前の内科診療施設です。続いて1965年に内科の奥に外科診療施設が建設され、戦後20年を経て、ようやく家畜病院が完成したのです。扉の開いているところが家畜病院の入り口で、その右側が内科の診療室です。写真左の木の陰に見えるのが外科の建物です。奥の背の高い建物はアルコール発酵工場です。この時代は、中流家庭が増加しペットが家族の一員になり始めた頃でしたが、私が大学院生だった1976年頃までは、まだ夕方に野球をする余裕がありました。内科と外科の間に中庭があり、そこに教育用の馬や牛を飼っていましたが、そのエサを目当てにネズミが徘徊し毎年春になるとそれを捕食するアオダイショウの抜け殻が見られました。しかし助手として働いていた1980年頃には動物収容能力は限界を超え、3K職場(きつい、臭い、汚い)になってしまいました。

1991年、写真の建物の場所に現ベテリナリーメディカルセンターが竣工しました。この建物もすでに20年を経て狭く老朽化し、海外のような獣医学教育の細分化、臨床教育充実には耐えられない建物となりました。大幅な増築が学生からも飼い主からも強く望まれているのですが……。

動物医療センター長 獣医外科学研究室

佐々木伸雄 教授